

内野安打の研究

A study of infield hit

1K05B009

指導教員

主査 彼末一之先生

甘井 謙吾

副査 倉石平先生

「緒言」

野球という競技では点を取るために攻撃側は打者は出塁するように、守備側は点を与えないために打者を出塁させないようにする。しかし攻撃側は野手の間を抜くようなクリーンヒットはなかなか打てない。そこで内野安打やエラーといった手段で出塁することも重要になってくる。打ち損なった打球だとしても全力で走れば内野安打になる可能性があり、「ゴロを転がせ」といったような指示が監督・コーチから与えられることも多い。

アメリカメジャーリーグや日本プロ野球といったトップレベルの野球においても、ヒットを量産している選手は、巧みなバットコントロールもさることながらも、俊足を活かして内野安打にすることが少なくない。事実、青木(東京ヤクルト)が2002年にプロ野球史上二人目の200本安打(通算202本)を放ったうち、四分の一にあたる51本が内野安打であった。このように、打者が打ってから一塁へ到達する駆け抜けのスピードは、現代野球において非常に重要である。また、一塁までの到達スピードを高めることは、安打数を増加させるだけではなく、送りバントや内野ゴロによるダブルプレーといった場面においても、アウトを減らす一要因として大きな効果を生む。このように一塁までの駆け抜けのスピードアップは非常に重要であるが、これまでの野球に関する研究では、バッティング、ピッチングを取り扱ったものがその大半を占め「走り」に注目したものはほとんどない。走りを活かし、アウトだと思った内野ゴロが内野安打になれば守備側にとっては脅威になり攻撃側にとってはチャンスになるだろう。そこで本研究では、

内野手のゴロの捕球時間及び一塁への送球を計測し、ゴロがセーフになる為の決定要因を目的とした。

「方法」

投手の投げた球を打者がスイングしインパクトした瞬間から内野手が捕球するまでの時間と、内野手が捕球してから一塁手へ送球し一塁手が捕球するまでの時間をそれぞれストップウォッチで計測した。ストップウォッチの操作は同一検者がインパクトした瞬間にストップウォッチをスタートさせ、内野手が捕球した瞬間にラップ時間を取り、その後一塁手が捕球した瞬間に、ストップを押した。

「結果・考察」

プロ野球と大学野球の比較

インパクト～捕球までの時間が長ければセーフになる確率が上がると推察される。また、大学野球のほうが内野安打になりやすいと考えられる。

三星でセーフになる確率が違う

プロ野球は三星での内野安打がなかったのに対して大学野球は三星での内野安打の確率が非常に高かった。この違いはなぜだろうか。大学打者のほうがセーフティーバントが多いということ、左打者が反対方向に打球が多いことが考えられる。もう1つ考えられる点はプロの選手は全力で走らない、一塁ベース手前で力を抜いていることが多いことである。打球が野手の正面に飛んだりすると全力で走らないことが多いが、大学の選手は一塁まで全力で走っている。これらのことから大学野球のほうが三星の内野安打が多い要因だと

推察される。

プロ野球・大学野球での内野安打の目安

プロ野球・大学野球を比較するとプロ野球は 4 秒以内に一塁を駆け抜ければセーフになる確率が高いのに対し、大学野球は 3.5 秒以内に一塁を駆け抜ければセーフになる確率が上がる。

純粋に俊足で内野安打になることは稀である。しかし、打球方向や打球の強さ、またランナーがいる場合などの状況によっては、一塁までの駆け抜けスピードが速ければそれだけセーフを狙いやすく、守備の乱れも生じてくると考えられる。

「まとめ」

一般的に言われるように、一塁に近い左打者が内野安打になりやすいのは確かだが、打球の強さ・どこに打球が飛んだか、一塁まで全力で走るかどうかといったことも大きく関係すると推察される。また、純粋に俊足で内野安打になることは稀である。しかし、ランナーがいる場合などの状況によっては、一塁までの駆け抜けスピードが速ければそれだけセーフを狙いやすく、守備の乱れも生じてくると考えられる。